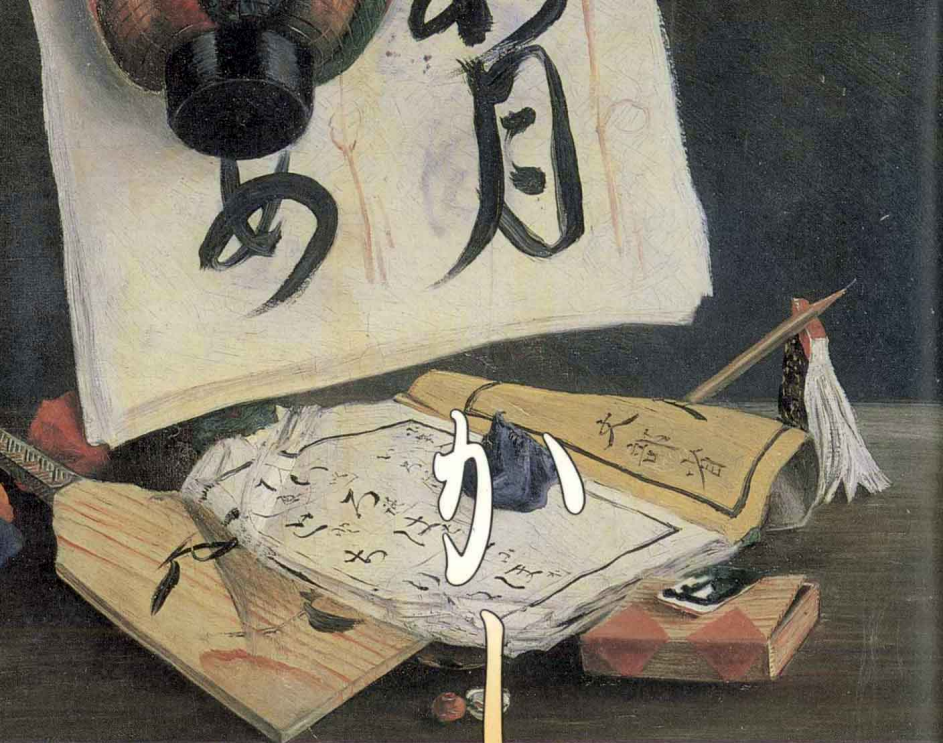




森まゆみ

一葉

『通俗書簡文』を読む

筑摩書房

森まゆみ

かしこ
一葉

筑摩書房

森まゆみ

東京都文京区動坂に生まれる。

早稲田大学政経学部卒業。

一九八四年地域雑誌『谷中・根津・千駄木（愛称「谷根千」）』を創刊。現在、「谷根千」の仕事をこなしつつ、新聞、雑誌、テレビ、講演と幅広い活動をしている。著書に『谷中スケッチブック』『不思議の町根津』『読書休日』『明治東京畸人傳』『明治快女伝』など多数。



かしこ一葉 『通俗書簡文』を読む

一九九六年十一月二〇日 第一刷発行

著者 森 まゆみ

発行者 柏原成光

印刷 精興社

製本 積信堂

発行所 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五―三
振替〇〇一六〇―八四一二三

ご注文・お問い合わせ、乱丁・落丁本の交換は左記宛へ。
〒三一大宮市櫛引町二一六〇四 筑摩書房サービスセンター
TEL 〇四八―六五一〇〇五三

目次

かしこ一葉『通俗書簡文』を読む

序

新年の部

- 年始の文●同じ返事 9 としの始友におくる●同かへし 14 新年会断りの文●同じ返事 19 歌留多会のあした遺失物をかへしやる文●同じ返事 24 田舎の祖母に寒中見舞の文●祖母に代りて従妹より返事 27

春の部

- 余寒見舞の文●同じ返事 35 初午に人を招く文●同じ返事 39 梅見に誘ふ文●同じ返事 43 初雛祝ひの文●同じ返事 47 三月ばかり初奉公の友に●同じ返事 50 小学校の卒業を祝ふ文●同じ返事 55 春雨ふる日友に●同じ返事 59 花見誘ひの文●同じ返事 63 汐干狩に誘ふ文●同じ返事 68 花の頃都にある娘に●同じ返事娘より 71

夏の部

- 花菖蒲見に誘ふ文●同じ返事 81 蚕豆を人におくる●同じ返事
85 新茶を人におくる文●同じ返事 90 人の新盆に●同じ返事
94 暑中見舞の文●同じ返事 99 朝顔見に誘ふ文●同じ返事 102
雷鳴はげしかりし後友におくる●同じ返事 106 避暑に行つる人へ
●同じ返事 110

秋の部

- 残暑見舞の文●同じ返事 117 草花に添へて人のもとに●同じ返事
121 野分見舞の文●同じ返事 125 月見に人をまねく文●同じ返事
129 人の家に菊植たりけるを聞て●同じ返事 133 紅葉見に誘ふ文
●同じ返事 136 姉のもとに栗もらひにやる文●同じ返事 140

冬の部

- かりたる傘を時雨のゝちかへす文●同じ返事 147 冬のはじめ仕立

雑の部

- 物の手伝ひをたのむ文●同じ返事 151 初霜ふりたる日老人のもと
に●同じ返事 155 天長節に人を招く文●同じ返事 159 徴兵に出
たる人の親に●同じ返事 163 雪の日人のもとに●同じ返事 168
歳暮の文●同じ返事 173

祝いの文

- 婚礼祝ひの文●同返事 179 出産祝ひの文●同じ返事 183 開業祝
ひの文●同じ返事 187 新築落成をいはふ文●同じ返事 191

依頼の文

- 媒妁たのみの文●同じ返事 195 家を買はんとて人にたのむ文●同
じ返事 200 奉公人の代りを求むる文●同じ返事 203 猫の子をも
らひにやる文●同じ返事 208 娘の嫁を人にたのむ文●同じ返事
211 書物の借用たのみの文●同じ返事 216 留守中たのみの文●同
じ返事 221 俄に家を移せしを人につぐる文●同じ返事 224

忠告の文

雇人の逃亡を人に告る文●同じ返事 229 愛犬の行衛なく成しを友

につぐる文●同じ返事 235 家を売らんといいふ人の老婢がもとに●

同じ返事 241 友の驕奢をいさむる文 249 離縁を乞はんといふ人

に●同じ返事 254 友の不養生をいさむる文●同じ返事 259 事あ

りて仲絶えたる友のもとに●同じ返事 263

あやまりの文

留守中來たりし人のもとに●同じ返事 272 注文物の日限おくるゝ

を良人に代りて謝する文●同じ返事 278 人の家の盆栽を子のそこ

なひつるに●同じ返事 283

お礼の文

雇人の周旋を受けし人のもとに●同じ返事 288 饗応にあづかりし

後人のもとに●同じ返事 292

招きの文

法事に人を招く文●同じ返事 297

お見舞の文

- 試験に落第せし人のもとに●同じ返事 301 不縁に成し人をなぐさ
むる文●同じ返事 305 愛子をうしなひし人のもとに●同じ返事
311 火事見舞の文●同じ返事 317 負傷見舞の文●同じ返事 320
地震見舞の文●同じ返事 324 盗難見舞の文●同じ返事 328 死去
を弔ふ文●同じ返事 333

唯いさゝか

- 通俗書簡文の構成 349 半井桃水への手紙 361

- 日暮し養福寺への道——あとがきにかえて 366

- 参考文献 375

かしこ一葉

——『通俗書簡文』を読む



明治 21 年頃女学生姿で太田竹子と撮影
(木下奎太郎記念館所蔵)

本文カット
森 まゆみ
本文図版
「風俗画報」より

序

手がみの文はさのみことぐ敷ことゑらびせんよりたれにもわきやすくすなほなる詞もて思ふこゝろをさながらいひあらはさるゝやう書ならひたらば其ほかにことなかるべしこと葉の自由を得たらましかばいはんとおもふは我が心なればおのづからのたくみはもとめずしてとりいでらるべくやされば此文たゞ初まなびが友にと斗ゑらびて夕月よたどぐ敷みちのしるべにもなどいふにはあらずかし

夏子しるす

人から手紙を貰うのはうれしい。夫の転勤についていったある友は、友だちもまだできない地方の町から「郵便受けにあなたの手紙を見つけると、砂漠でダイヤモンドを拾ったような気がします」と書いてきた。そういわれると張り合いもあって、せっせと手紙を書こうと思う。

こうした気安い幼なじみへの手紙や、他のことは放つてもいまわが心を伝えたい、と筆が走

る恋文はいざしらず、お礼の手紙、頼み事の手紙、断わりの手紙などは気が重く、つい一日のばしにしてしまいがちだ。そのうち時を逸し、筆不精とか礼儀をわきまえぬ人というレッテルが張られてしまうのだから、手紙を早めにきちんと書くことは大切である。頂きものをしたその日折返し、電話でお礼をいう人もあるが、それも少し余韻がない。せっかく静かに差し出されたものには、心深い手紙で応えたい。電話をかけても相手がいるとは限らないし、もしかして忙しい仕事の最中かも知れないから。

これから紹介する『通俗書簡文』は、明治二十九年十一月二十三日、満二十四歳で亡くなった一葉樋口なつ子（夏子、奈津子とも）が書いた手紙の書き方の実用書である。亡くなる年の五月に博文館より発行、一葉の生前に本の形で刊行された唯一のものである。

肺結核で死期の近い一葉には、このような実用書ではなく、小説など本来の仕事をもっとさせてあげたかった気もするが、さすがに「たけくらべ」「にぎりえ」の作者一葉ならではの美しい文章が並び、また小説家らしい想像力の駆使されたユニークなものである。

以下、いままであまり注目されず、全集の片隅に入れられても読者の少なかった本書を私なりに読み解き、明治時代の女性の手紙の書き方に学んでみたいと思う。

大体、このような手紙の指南書自体、印刷技術の発達によつてはじめて可能になったもので、それまでは、親から子へ、あるいは先輩から後輩へと伝えられたものであったろう。こうした文範が出来たこと自体、大変便利なことで、本書が明治末までに三十五版を重ねた、というのもし

かに必要とされていたかがわかる。最初は、版元の編集者である大橋又太郎（号乙羽）という男性名が著作者の欄にあった。一葉の名は死後いやましに高くなり、商業政策もあってか、途中で著作者の名は樋口なつ子と替えられた。

「通俗」とは現在とはニュアンスがちがつて、「俗っぽい」という意味でなく「わかりやすい」とか「誰にでも読める」「一般向き」ということだろう。明治時代にはいまの社会教育を「通俗教育」と称し、書簡のことを「通俗文」といったと『広辞苑』にある。そして本書の成功もあって、女性のための「手紙の書き方」本は増え、下田歌子、与謝野晶子、平塚らいてうら、当代一流の文筆家、評論家もこれに手を染めている。

本書ではまず巻頭に、手紙を書こうと思ったら、あまり肩に力を入れて大げさな言葉を選ぶより、わかりやすく、すなおなことばで、思うところをそのまま自由に現わしたらよいのです、それに尽きますと述べている。

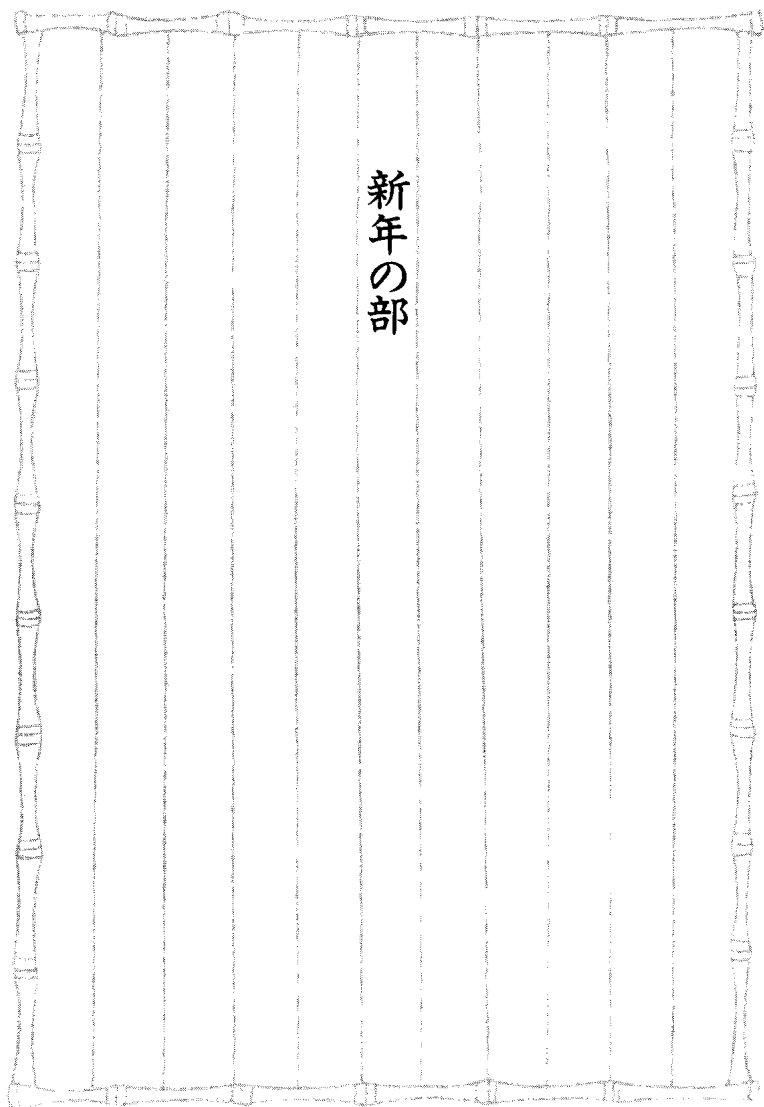
これは言うはやすく行うのは難しいことである。言葉を自由に使うことさえできれば、言いたいと思うのは自分の気持なのだから、とくに技巧に凝らなくても、そのまま自然に言葉が出てきます、とあるが、いやそう簡単ではない。

一葉自身も竜泉寺町に住んでいたころの日記に、「唯をしき処は学あさくして、とる筆つたなく、おもふ半をもうつすにかたければ、霞を隔て、遠山の花をおもふが如く手折ていざといひ難きぞ侘しき」（明治二十六年十一月）と書いているくらいである。遠山の高嶺の花の美しさを、く

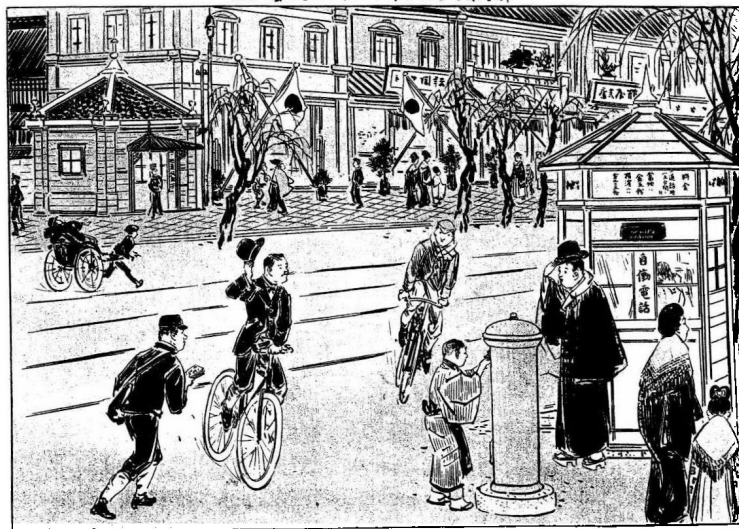
まなく描きたいではないか。手折ってさあどうぞというように文にして差し出したいではないか。言葉の自由。自由という言葉は古くからあるが、明治五年、中村正直が『オン・リバタイ』を『自由之理』として翻訳出版、そして自由民権運動の高まりと共に普及し流行した。その漢語を、うら若い女性の一葉がここで用いているのが興味深い。

さあ、一葉を導きの星として、ことばの自由への道をたどってみよう。

新年の部



徳義 花の散りふりやるを春と木と



市街の花（山本松谷画）